

セイの選択



設定

ノンケ陸上部大学生 × マッサージ師兼宗教団体代表

マッサージ師による音、映像、香りによる洗脳マッサージから始まり、宗教団体が使っている、人に快感を呼び起こし、依存させる銀粉でさらに追い詰めていくお話です。

(※最初からずっと銀色ペイント責めというわけではなく、物語の後半から登場します。SMというよりは洗脳メインです)

登場人物

篠原 拓(しのはら たく) 21 歳 4 年 陸上部部員

無邪気で明るい。少年がそのまま成長したような性格。

宮田 尊(みやた たける) 21 歳 4 年 陸上部部員

知的でクールに見えるが、いつも人の気持ちを感じて行動している。

本堂 正一(ほんどう しょういち) 48 歳 マッサージ師兼宗教団体代表

穏やかそうに見えるが実際は残酷。粘着気質。

佐藤 翼(さとう つばさ) 30 歳 陸上部コーチ

指導の際は厳しいが、それ以外はとても気さくで学生から慕われている。

練習

「なあ尊、今日俺のペースちょっと速すぎた？」

拓はタオルを首にかけてまま、悪びれもせず笑った。

「速すぎたというか、最初から全開だっただけだろ」

尊は給水ボトルの蓋を閉めながら、淡々と返す。

「え、そう？ だって気持ちよかったんだもん」

「それで後半、バテバテになって顔真っ赤だったのは誰だと思ってる」

拓は一瞬きょとんとしてから、へらっと笑った。

「見てた？」

「見てるに決まってるだろ。隣で走ってるんだから」

尊はそう言って、拓のシューズの紐が緩んでいるのに気づき、しゃがんで結び直している。

「ほら、また」

「え、ありがと。ほんと世話焼きだよなあ」

「放っとくと怪我するからな」

拓は少し照れたように笑って、尊の肩を軽く叩く。

「なあ、俺さ、尊が同じ学年でよかったわ」

「急に何だよ」

「だってさ、尊いると安心するんだよ。俺がバカやっても、ちゃんと見てくれるし」

尊は一瞬だけ目を伏せてから、いつもの調子で答えた。

「……お前が走るの、嫌いじゃないからな。それだけだ」

「それだけで十分！」

拓は満面の笑みでそう言って、先にグラウンドへ戻っていった。

尊はその背中を見送りながら、小さく息を吐く。

「俺もだよ…」尊は心の中でそうつぶやきながら、微笑んでいた。

遭遇

商店街へ向かう道は、夕方になると決まって人が増える。

拓は腰の奥にある違和感をかばうように歩幅を調整しながら、コーチに教えられたマッサージ店の住所をスマホで確認していた。練習中にひねってしまったのだ。

通りの先が、妙にざわついている。そのざわつきに近づくにつれ、拓は足を緩める。

——銀色……。

男たちの全身が、夕陽を受けて鈍く光っている。頭から足の先までを銀色に塗られた男たちが踊っている。年齢はまちまちだが、全員が同じ動きで、同じ方向を向き、同じテンポで踊っている。振り付けは単純だが異様に目をひく動き。

さらに異様なのは全員が坊主で、全員が精一杯笑っていることだ。視線はどこか遠くに固定され、口元には不自然なほど整った笑みが貼りついている。楽しそうというより、満たされているような笑顔。そして、銀色のパンツ以外は何も身に着けていないむき出しの状態に進んでいる。

理由は分からないが、長く見てはいけない気がした。

拓は視線を外し、集団の脇をすり抜ける。銀色の男たちは、拓の存在に一切反応しない。肩が触れそうな距離ですれ違っても、動きも笑顔も崩れなかった。

(あれが尊が言っていたやつか…)

一種の宗教団体で、時折夕方商店街で奇妙な舞をしていると尊が話していたのを思い出す。

拓は小走りに目的地を目指した。

商店街の一角、控えめな看板に「マッサージ本堂」と書かれた店が見えてくる。ガラス越しの店内は静かで、外の異様な光景が嘘のようだった。

中に入ると優しくそうな店長らしき人が出迎えてくれる。

「いらっしゃいませ。本堂といいます。慌てているようですが、どうかしましたか？」

「こ、こんにちは。篠原といいます。佐藤コーチの紹介できました。いえ、外に変な集団がいたもので……」

「変…ですか、はははは。あれは彼らなりの“セイ”の表現なんですよ、人によってその生き方が違うように、表現の仕方もいろいろとあるのです……佐藤さんから聞いてますよ、さあ、こちらへどうぞ」

そういうものかと思いながら、男に案内されたのはカーテンで仕切られたマッサージ用のベッド。

そこでマッサージ用の紙製の T バックに着替えると、うつ伏せに寝ながら待つ。ベッドの顔の位置は空洞となっているが、その下には大きなタブレットが置かれており、神秘的な映像が流れている。